

## 明治期後半の竹内栖鳳の活動

### —高島屋の海外万国博覧会への染織作品に注目して—

廣田 孝 (京都女子大学)

現在、高島屋百貨店として知られている高島屋は、明治時代には京都の呉服商であった。明治期の高島屋は日本画家に染織下絵を依頼し、それを元に染織作品を制作、海外の万国博覧会に継続出品して高い評価を受けていた。1900年パリ万博は、国家挙げての参加であった。その中で、出品作品「ビロード友禅壁掛 波に千鳥図」によって出品者・飯田新七(高島屋)は金牌を受賞し、竹内栖鳳はこの作品図案の考案者として協賛金牌を受賞した。以来、高島屋のビロード友禅は国内外で不動の名声を獲得した。

竹内栖鳳は明治22年から高島屋意匠部に1年2ヶ月間、勤務して染織作品の下絵描きをしていた。その後は単なる下絵描きではなく、重要作品の下絵を描き、同時に飯田新七(高島屋)のブレンとして活動していたようだ。元高島屋美術部顧問という肩書きを持つ中西嘉助は、『塔影』第16巻第11号(昭和15年)において「パリ、シカゴ、セントルイス、ロンドンと引続いて萬國博が開かれたが、高島屋の出品物の目星しいものは、殆んど(栖鳳)先生の御厄介になった。出品物は屏風、素晴らしく大きな刺繍、ビロード友禅の壁掛等であつたが、いずれも(栖鳳)先生の御努力のお蔭で最高賞を獲得し(以下略)」と記述している。

平成20年から高島屋史料館の所蔵品調査で、この1900年パリ万博出品作品下絵、1904年セントルイス万博出品作品下絵を見出した。今までは白黒の記録写真が残されているだけだったので詳細な研究ができなかった。また1910年日英博覧会の下絵も史料館に保管されていた。

3万博の出品作品を検討できる状況になったので、実際に出品作品の下絵を比較検討してみると、1900年パリ万博、1904年セントルイス万博、1910年日英博覧会への出品作品のうち代表的な作品が「墨絵」を基にした染織作品であることが判明した。

また明治31年の京都日出新聞には、制作途中であったパリ万博出品作品「ビロード友禅壁掛波に千鳥図」に関して、京都日出新聞記者・黒田天外が飯田新七に取材した記事も掲載されている。このような新聞記事も収集して検討の材料としたい。

明治40年の文展開設以来、栖鳳は審査員として文展を舞台にして活躍したが、文展開設以前の時期、即ち高島屋での栖鳳の活動は、いままであまり理解されていなかった。海外万博に出品された染織作品は現地で売却されており、国内では検討できなかったからである。

今回、これらの発見した染織作品の下絵や関係者の言説などによって栖鳳の活動を検証したい。

なお栖鳳は1900年パリ万博に日本画を出品していた。また、栖鳳自身は公務出張という形で、明治33年8月から渡欧し、パリ万博視察後、欧州を巡遊して、翌年2月に帰朝した。